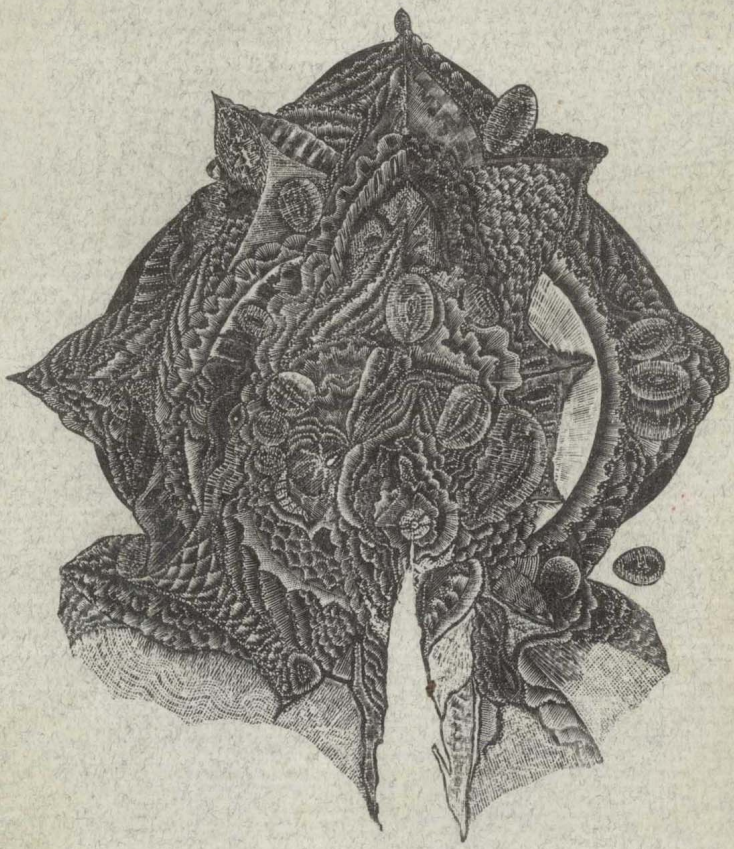
遙かなる旅へ

長谷川 修



遥かなる旅へ

昭和四十九年六月十日　印刷
昭和四十九年六月十五日　発行

著　者／長谷川修

発行者／佐藤　亮一
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七十一
電話／東京(〇三)二六〇—一一一一
郵便番号／一六二
振替／東京八〇八
印刷所／株式会社金羊社
製本所／株式会社大進堂

定価七八〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
© Osamu Hasegawa Printed in Japan 1974

遙かなる旅へ

色不異空　空不異色
色即是空　空即是色

羯諦　羯諦　波羅羯諦
波羅僧羯諦　菩提娑婆訶

《仏説摩訶般若波羅蜜多心経》

第一章

1

……先ほどまで右手の樹間に見え隠れしていた海は、もうすっかり見えなくなってしまった。

足許に細々と続く小径は、殆どあるかないかの状態で、向うの黒々とした暗鬱な感じのする森の中へ消え込んでいる。

『富登嶋みち』――そう彫りつけてある道標を過ぎてから、かれこれ小一時間は歩いている。灰緑色の苔を斑紋のようにまといつかせた道標の石柱は、ずいぶん昔に立てられたものらしく、長年月の風雨にさらされてすでにボロボロに風化し、ひっそりと道傍の草叢の中に立っていた。苔に掩われた表面には、すっかり薄れて見えにくくなっていたが、『富登嶋みち』と彫り込んである文字が、それでもかすかに読み取れた。

径は一本道で、途中に分れ道になったところもなかったから、まずこの小径が富登島へ通ずる、かつての旧道であることは間違いないだろう。それにしても、森の中を殆ど消え入りそうに断続するこの旧道は、廃道になってすでに久しいとみえ、人の通ったような形跡すら見受けられない。

富登島――実のところこの富登島は、一応島という名がついているけれども、もともとは島で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はない。半島の先端が丸くふくらみ、ちょうど蝮の頭部みたいになっている。つまり、半島を蝮の胴体にたとえるなら、半島の先は頸の部分で一旦細くくびれたあと、頭の部分がまたズングリとふくらんでいる。その先端部のふくらんだ部分が、富登島と呼ばれる土地なのだ。もっとも現在富登島の住民たちは、専ら海路を利用しているとみえ、半島を縦走するかつての旧道は、今ではもう人の通った気配さえ見出せぬほど、完全に廃道になり切ってしまっている……

ここに来るまで、私はずいぶん奇妙な感じのする場所を通って来た。

それは、夏だというのに、森の木々がみんな一様に、立ち枯れたようになっているところだった。それらの木々はすべて、あたかも白い骨をさらしているように立っていて、枝についたごくまばらの葉は、どの葉を見ても、黒ずんだ色をして生気がなかった。中には完全に立ち枯れて、朽ちた幹に黒々とした空洞をポッカリあけている木もあった。

しかし驚いたことに、それらの木には、沢山の蟬がとまっていた。それも、鈴なりという形容があながち大袈裟と云えないくらい、どの木にも細い小枝の先に至るまで、びっしりとおびただしい数の蟬がとまっているのだった。それらの蟬はすべてクマゼミで、夏の朝方、木のてっぺんにとまって尻をせわしく動かしながら、きわめて威勢よく鳴き立てる、あの王様ゼミと呼ばれるやつである。漆のような胴体に、緑色の線条の走る透き通った翅、それに雄蟬は腹部に柿の種に似た発声器を持ち、梢で一しきり鳴き立てると、すぐさま黒い弾丸みたいに飛んで行く……あの蟬の中の王者の貫禄を持つクマゼミたちが、今はもはや威勢のいい鳴声をすっかり忘れてしまったかのように、立ち枯れた森の枝という枝に、おびただしく安らっているのである。

それらの蟬たちは完全に沈黙し、枝にまつわりつくようにとまったまま、コソとも動こうとしなかった。彼等はみんな、深い午睡に眠りこけているようだったが、よく見ると、中には互いに

尻の先をくっつけて、微動だにせず交尾しているのもいた。私はそっと手を延ばして、小枝を抱き込んで眠っている一匹をつかまえてみた。その蟬が私の掌に爪を立て、強い力でもがくだろうと予想していたが、それは予期に反して全く抵抗せず、私の掌の中で、まるで死んだようにひっそりとしていた。だが、死んでいるのでもない証拠に、ほんの申訳みたいに、肢の先をモゾモゾと動かしている。それは雄蟬で、腹の下に柿色の発声器を持っていたが、その柿色は決して鮮やかな色とは云えず、何だか灰色じみた生気のない色をしていた。その弱々しげな感じから、それらの蟬はみんな、たったいま脱皮したばかり、という風に思えないこともなかった。

私は掌の蟬を、軽く抛って逃がしてやった。ところがそれは、空中を弾丸のように勢いよく飛んで行くかと思いきや、私の足許に、ポトリと軽い音を立てて落ちてしまった。地面に転がった蟬は、もう肢をピクリとも動かさず、どうやらそれで簡単に死んでしまったらしかった。

私は驚いて、もう一度、枝にとまった蟬たちをよくよく観察した。そして指先でそっと触れてみたが、それでも落ちまいとして枝にすがりつくところを見ると、彼等はあながち、死んだまま枝にとまっているのでもなかった。鞭のように真直ぐ延びた小枝の先に、三匹の蟬が重なり合うようにとまっていた。私はその小枝を揺すってみた。すると三匹ともあっけなく地面へ落ち、足許に転がった蟬たちは——もはや動こうともしなかった。

蟬たちの墓場——私はやっと、その立ち枯れた森全体が、蟬たちの墓場になっていることに気がついた。死にかけた蟬たちが全部、彼等の墓場の森に集まって来て、そこで静かに死を待っている。何千匹というおびただしい蟬、いや、森全体では、その数はおそらく何万匹という数にも上るだろう。それら何万匹の蟬たちが、いま彼等の聖なる死の森に集まり、異様な沈黙の中に安らいながら、生から死へと移りゆく時のかげろいを、各自の目でひたすらじっと見つめている。

実際、彼等の複眼の目には、あたりにさすらう死神の影が明瞭に写っているのかもしれない。たしかにそこには、死が音のない時計のように沈黙の時を刻み、あらゆる時刻の蔭に、死神が身をひそませている感じで、既に時間そのものが死といえるのかもしれなかった。そう云えば、森全体が死のよそおいをして、骨のように白い無数の木々の立ち枯れた森自体が、何か透明な衣をまとった死神の姿みたいに思えて来るのだ。

その森の遙か彼方に、陰鬱な色調でひろがる海が望まれた。そこから見る海の色は、どんより曇った空の下で暗くくすみ、あたかも暗鬱な死の色を湛えているように見えた。そして気のせいか、そこここの立木の幹にポッカリ黒い口をあけた空洞が、すべて髑髏の目つきをして、暗い眼窩の奥から一斉に、私を凝視しているように思われた。私は思わず身震いをし、急いでその森を駆け抜けた——

目指す富登島までには、まだかなりの道のりがあるようだった。何故なら、半島の先端部の富登島にたどり着くには、その手前で蝮の頸のようにくびれた地峡の部分を通る筈である。その地峡部では、径の両側に海が見渡せるだろう。しかし左右に海が見えてくるどころか、今まで右側に見えていた海すら、深い森に遮られて見えなくなってしまった。ということは、その地峡の部分に到達するまでに、まだ少々距離があると思わねばならない。

径は薄暗い森にかかっていた。あたりの木はびっしり厚い葉を繁らせて、それはどうやらヤマモモの木のようであった。一体にこのあたりの木々は、先ほどの立ち枯れた蟬の墓場の森ほどではないにしても、夏だというのにどの木にも、まるで生気が感じられなかった。たしかに曇った天候のせいもあるだろうが、とにかくこのあたり一帯に生い育つ木々には、一様に生気というも

のが感じられず、何か夏の冷害に見舞われたような趣があるのだ。
現にヤマモモの木にしても、一応は葉をこんもり繁らせているものの、暗緑色の葉の色は、緑というより黒に近く、さっぱり生気を感じさせない色合である。黒々とした葉叢の間には、暗赤色の乳頭状顆粒を持つヤマモモの果実が、いくつも丸い実をのぞけているが、その果実の色にしても、すでに赤味は全く失われて、殆ど黒一色のように見えるのである。
かつて私の聞いたところでは、ヤマモモというのは、蛇が好んで住みつく木だということだ。何でも山陰地方の小島に、全島ヤマモモの木で埋まっている島があり、その島に一歩踏み込んでみると、すべての枝という枝に、蛇がウジャウジャ、まるで女の髪の毛のようにからみついているのだそうである。その島は全島隙間もないくらい、びっしりヤマモモの木で掩われているのだが、それらヤマモモの木の数を遙かに上廻る厖大な数の蛇が棲息しており、おまけに島の主、つまり蛇たちの王に当るものは、それこそ完全に大蛇と云えるほどのすばらしく大きな黒蛇で、その黒大蛇の王が大勢の子分どもを従えて、ヤマモモの枝から枝へ、ザワザワと鱗をきらめかせながら渡って行くところは、さながら島の中に、時ならぬ黒い山水でも噴流しはじめたように見えるのだそうである。
蛇という奴は気味の悪い動物だが、しかし私は、他人が怖がるほどには蛇を恐れない。同じ爬虫類でも、蛇よりむしろヤモリの方が苦手だが、いくら蛇を怖がらないといっても、蛇が束になってからみついている木の下を歩けと云われたら、私とてやはり足がすくんでしまうだろう。メデューサの頭髪さながらに、無数の蛇がウジャウジャからみ合って鎌首をもたげているというのは、想像するだけでゾッとする。
そこで私は黒い葉をびっしり繁らせているヤマモモの枝を透かして見て、入り組んだ枝の間に

蛇がからみついていないかどうか、丹念に調べてみた。私は落ちていた枯木の枝を拾い、それでヤマモモの葉叢の間をつつきまわしたが、まずどの葉叢からも、蛇の這い出して来るような気配はないようだった。

森全体はシーンと静まって、物音一つしなかった。どんな森にも大抵小動物たちが住みついていて、例えば栗鼠だとか小鳥たちとか、そういう森の小動物たちが木々の間でカサコソ音を立てていてもよさそうなものだが、この森に関する限り、そんな小動物の住んでいそうな様子は全くなかった。私は暫く立ち停って、周囲の森に気を配った。立木の下葉の葉蔭あたりに、生物のうごめく気配でもないかと見守っていたが、森は相変らず水の中のように静まり返り、更に葉一枚動く気配もないようだった。

大体、こういう風に静まり返った森というのは、えてしてとても気味が悪いものだ。何故なら、そんな森には、小動物たちが恐れて近づかない何らかの理由がある筈だからである。例えば、森の小動物たちを片っ端から捕えて呑んでしまう大蛇が住みついている、という風な——。

私は枯枝の棒を提げ、暗い森の中をそろそろと歩いて行った。もし頭上から大蛇が鎌首をもたげて垂れ下って来たら、即座にその棒で大蛇の首を、思いきり一撃してやるつもりだった。果してそれでうまく行くかどうかはわからないが、念のため、私はジャック・ナイフを片手に握りしめていた。柄のボタンを押せば、ピンと刃の飛び出すナイフである。

しっとり湿気を含んだ落葉を踏んで行くと、不意に何やら首筋に、冷たいものが降りかかって来る。あわてて手で振り払ったが、どうやら頭上の枝から雫が滴ったものらしい。ひょっとしてこの森は、山蛭（やまひる）どもの巣窟になっていて、獲物が木の下を通りかかると、彼等は一斉に驟雨のように降りかかり、忽ちのうちに獲物を骨だけにしてしまうのではないか——。そんなことを考え

ると、背筋のあたりがゾクゾクして、足が前へ進まなくなってしまう。

だが幸いなことに、その暗い森はあまり長く続かず、間もなく梢の間から陽光の射すところへ出た。もっとも陽光といっても、ギラギラ照りつける夏の直射日光ではなく、相変らず厚い雲にさえぎられた、初冬を思わせるような鈍い光なのである。

更に私は進んで行った。……ほど経て、雑木林のゆるい坂道にかかったとき、またまた私は足を停めた。前方左手の薄暗い木立の下あたりに、何やら異様な雰囲気の立ちこめているのを感じ取ったのだ。

そこには大きな樟の老木が、あたり一面に枝を張り、下葉に掩われた木の下は、気味が悪いほど暗かった。下葉は殆ど羊歯類で、見馴れない形をした鋸状の葉が幾重にも重なり合い、それぞれの葉裏には、無数の胞子をくっつけている。のみならず、それら羊歯の間には、まことに黒々とした木の影が落ちていた。

私はおそるおそる近づいて、その黒い影を覗いて見た。木の影にしては、あまりに黒すぎると思ったが、なるほど黒すぎる筈、そこには真黒い漆のような水を湛えた池がひろがっているのだった。広さはおよそ二、三十坪くらいのものであろうか、腐り切った水がどす黒く淀んでいる上に、朽ちた落葉があちこちに浮かんでいる。そしてその水面から、何やら異様な匂いとも瘴気ともつかぬものが、霧のように立ち昇っているのだ。

私ははじめその瘴気を、羊歯の胞子が撒き散らす微細な粉末かと思っていた。胞子粒の粉末が蒸気のように立ちこめて、異様な匂いと雰囲気を醸し出しているのだろう、と思ったのだ。だが、それは羊歯のせいでなく、真黒い腐った水の淀みから立ち昇って来るものであることがわかった。

その水は実際、漆さながらに黒々として、水飴のように重く淀んでいた。黒い水面のそこここ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に、朽ちた枯葉が一ぱい浮き沈みしている。しかしよく見ると、それらの枯葉は落葉ではなく、蛙、いや、蝦蟇なのだ。真黒に淀んだ重い水の上に、そこにもここにも、おびただしい蝦蟇が浮かんでいる！

それらの蝦蟇はみんな掌ほどの大きさで、ボッテリと胴がふくらみ、背中一面無数のいぼいぼに掩われている。そのいぼを見ると、急にこちらの皮膚にも一面いぼがブツブツ吹き出し、何か妖術でこちらの体までが忽ち蝦蟇にされてしまいそうな感じなのだ。一匹の蝦蟇の背に負ぶさるようにして、もう一匹の蝦蟇――そして、それぞれの蝦蟇がみんなそんな風に、子供の蝦蟇を背に負ぶっている……と思ったら、驚いたことに、彼等は互いに二匹ずつ負ぶさりっこしながら、水の上で交尾しているのである。

交尾している蝦蟇たちは、水の上にじっと浮かんで動かない。ノソノソと動いているのは相手のいない蝦蟇だが、その動作は実に鈍い。そして黒い水を湛えた池は異様な沈黙に包まれており、その沈黙の中でおびただしい数の蝦蟇たちが、それこそ微動だにせず交尾を続けているのだ。

黒漆のような水面から立ち昇る異様な雰囲気は、実のところ、この黒い水の淀みの中で行われている蝦蟇たちの性宴の瘴気なのだ。その性宴がすべて沈黙の中で行われているだけに、何かこの世のものとは思えない不気味な雰囲気が漂っている！……私はふと、自分はいま、魔法の森の中にでも踏み込んだのではないか、というような錯覚を起しかけていた。

その気味の悪い蝦蟇の池を過ぎて暫く行くと、あたりの空気に海の匂いが混りはじめ、やっと木の間越しに海が見えるところへ来た。どうやら半島の地峡の部分へさしかかったようだった。左手の崖下に、ずっと海がひらけている。海はどんよりとした天候の下で、鉛色の色調を湛えて

ひろがっていたが、水面には波一つ立たず、どこまでも鏡のように凪いでいた。そちら側の海は彎曲した半島の内側に当っている筈で、そのように凪いでいるのは、入江になっているせいに違いない。その点、外海に面した右手の海は、たぶんこれほどまでには凪いでいないだろう。その右手の海はまだ見えなかったが、しかしすぐ間近に海が迫っているらしいのは、そちらから匂って来る磯の香と、わずかに湿りを帯びた潮風でわかった。のみならず、私は前方の崖の上に、大きな石柱がそそり立っているのを認めた。それは遠目にも、たしかに男根を象どった、実に大きな石の柱だった。

巨大な男根の石柱——富登島の入口に立つ、男根のトーテム・ポールなのである。

2

富登島——

ホトというのは、古代語で女陰を指す言葉である。ホトないしホドは秀処の意で、身体中で最も注意すべきところ、という意味だという。あるいはそれを火戸と書いて竈の口を意味し、古代では出産と火を結びつける信仰があるところから、ホトは火戸だという説もある。

ホトは地名にも多く見られ、富登、宝登、蒲戸、程、保土、堀戸、発戸、風戸、府殿、法道、百部、仏戸……等々、さまざまの文字が当てられて、その読み方も、ホト、ホド、フト、ホット……などいろいろだが、こういう地名のつけられている場所は、大抵女陰を想わせる洞窟や岩盤の亀裂があったり、また如何にも女性の股間を連想させるような谷間の窪地だったりする。クボというのも同じ意味で、程久保、程窪……といった地名も、やはり同義だということだ。

私がいま訪ねようとしている富登島は、九州は豊後の、豊後水道に突き出た半島の先端にある土地なのだ。もっと精しく云うなら、大分県南海部郡富登島——現在では津久見市に編入されて、保戸島という名で呼ばれているらしい。それに現在の地図でたしかめて見ると、半島の地峡部に狭い水路が作られて、どうやらこの保戸島は島になっているようだが、以前の富登島は半島と細い陸路でつながっていた筈なのだ。従って水路が作られているといっても、それは干潮時にはいくらでも歩いて渡れる程度のものだろう。

一体に九州の豊後地方は、平安時代の昔から独特の密教文化が栄えていたところである。豊後北部の国東半島から豊後南部の臼杵一帯にかけて、山奥の断崖に刻まれた磨崖仏や密教寺院が多く見られ、村里や山野のあちこちに、陰陽石が数多く分布している。陰陽石とは勿論、男女の性器を象どった石象のことで、その起原は塞神信仰と性信仰の結びついたものだと云われるが、もともとそれは密教と深い関連があり、かつて密教文化の栄えていたような地方には、とくに陰陽石も多く見出されるのである。

もっとも陰陽石は何も豊後地方に限らず、全国到るところに広く分布しているが、とりわけ豊後地方に多く見出せるということには、この地方に密教文化が栄えたことと相俟って、ある特別な理由が考えられるのだ。

東九州の豊後地方は、豊後水道ないし豊予海峡を隔てて、四国の伊予と相対している。伊予の国は別名を愛媛と云い、現在は県名も愛媛県となっているが、もともと愛媛があるからには、当然愛彦も存在した筈で、実のところ、四国西部の伊予の地が愛媛と呼ばれたのに対して、豊後水道を隔てて愛媛に向い合う九州側の豊前・豊後一帯の地が、古代では愛彦と呼ばれ、この愛媛と愛彦とは、互いに男女のカップルを形成する地域名になっていた筈なのである。

もう少し敷衍するなら、古代に於て豊前を中心とする九州東部の豊前・豊後一帯の豊国の地は、エヅマという名で呼ばれていた。これは安曇族の地という意味で、この地に住む人々は、エミシないしエゾと呼ばれていたのである。そして後に関東地方がアヅマと呼ばれるようになるのも、実は東九州の豊国一帯の地が古代に於てエヅマと呼ばれていたことと密接に関連しているのだが、それはともかくとして、豊前・豊後一帯のエヅマの地を「愛妻」という風に解して、古代語の「妻」は男女に限らず配偶者をツマと呼び慣わしたから、豊前・豊後の九州側の地を男性のツマ、つまり愛彦とするなら、豊後水道を隔てて愛彦と向い合う四国西部の伊予の地が女性のツマ、すなわち愛媛となって、この愛彦・愛媛で互いにエヅマのカップルを形成していたのである。

すると豊後水道は愛媛と愛彦との間の海峡で、豊後水道に面した一帯は、云わば愛媛・愛彦のセックス地帯だということになる。ちなみに豊後には磨崖仏で有名な臼杵という地名があるが、臼は陰で女陰を象徴し、杵は陽で男根をあらわしている。つまり臼杵とは陰陽の結合、男女の合体を意味する名で、豊後地方にこういう地名が存在する理由も、ここが愛媛と愛彦のセックス地帯に当っているからであり、またわが国の密教文化も、とくにこういう土地柄の場所に栄えたと云えそうなのだ。

ところで、この豊後臼杵の地のすぐ南が津久見で、その津久見から豊後水道に向って突き出た半島の先端が、私のこれから訪ねて行こうとしている富登島である。そして豊後のこのあたり一帯の地名には、臼杵や富登島に限らず、保戸、蒲戸……その他、セックスに由来すると思われる地名が数多く存在するが、それらはすべて密教文化と密接な関連を持ち、且つこの地方に陰陽石が多く分布しているのも、以上のような理由によると考えられる——

私は現在、京都の大学で、日本美術を専攻している大学院の学生だ。はじめ私が大学に入学したのは理学部の物理学科だったが、その後進路を変更し、美学美術史科へ転向した。そして現代美術のシュール・レアリズムに興味を持ち、卒業論文も西欧のシュール・レアリズム絵画をテーマに選んだが、大学院に進むと、今度は東洋のシュール・レアリズム、とくに日本の密教美術に深い関心を抱くようになった。その密教美術の中でも、とりわけ関心を抱くのは『胎蔵界曼荼羅』で、私は目下それを研究テーマに修士論文を書きかけているところである。

真言密教では、宇宙一切の現象を大日如来の現われと見、その教理は具体的に、金剛・胎蔵両界の曼荼羅によって示されている。金剛界とは外に顕われた表現の世界であり、それに対して胎蔵界の方は、内に拡がる内在の世界である。もっともここで外に顕われるとか内に籠るというのは、ただ単に人間を基準にして云っているだけのことで、そんな基準にとらわれなければ、別に内も外も区別はない。前者をかりに陽の世界と考えるなら、後者は陰の世界、また金剛界の根本理念を「智」という語で云いあらわすとすれば、胎蔵界の理念の方は、「理」とでも呼ぶべきものである。そして、この陰陽理智の両界を統合認識することで、もはや宇宙の森羅万象一切を超越した普遍の世界、つまり仏の世界を観ることが出来る——という風に説かれている。

こういう密教の教理はおそらく、現代物理学に於て無限大に広がる時空を究明する宇宙論や、物質窮極の単位としての微粒子を追究する素粒子論、それから数学に於て無限を考究する集合論や、さまざまの数学空間論と結局同じことを云っているのであろう。

私たちの目に見える現実の銀河系宇宙は、何十億光年という広がりに何千億かの星があったりして、全く気が遠くなりそうに広大だけれども、そんな銀河系宇宙を無数に集めた超宇宙があり、その超宇宙をまた無数に集めた超々宇宙があり、その超々宇宙をまた無数に集めた超々宇宙

……といった風に考えて行けば、まさに宇宙は限りなく広がって行く。

一方、物質の窮極に向っても、分子、原子、原子核、素粒子……という風に、極微の世界に分け入って行くと、物質の極微単位の素粒子の内部にも、マイナスの領域に広がる無限の世界、たぶん宇宙の無限大に匹敵する広大な反世界が広がっているだろう。

すると素粒子から超々々……宇宙に至る現実世界をかりに陽の世界、つまり外に顕われた金剛界と呼ぶなら、素粒子の向う側に広がる無限の反世界を陰の世界、つまり表に顕われない胎蔵界と呼んでいいだろう。そして素粒子は、私たちが真空と呼んでいる物質皆無の空間から、突如忽然として生れて来る。これは私たちの知覚の及ばない向う側の反世界から、こちら側の現実世界に、ともかく質量を持った物質として生れ出て来るのである。またこちら側の世界からは、素粒子の質量が一瞬にしてエネルギーに変態し、向う側の世界に消え失せて行く。

このような素粒子の生成消滅の過程は、おそらく密教の説いている金剛・胎蔵両界の教理と相通ずるものだと思われる。物理学はこの現実世界で実測出来るもの、つまり人間の知覚ではっきり捕えられるものしか扱わないが、そういう表に顕われるものばかりを対象にする物理学の世界観は、云わば金剛界的な観方と云えるだろう。それに対して数学の方は、現実世界で実測されようがされまいが、かりに私たちの現実世界が存在しようとすまいと、ともかく現実を超えた普遍の法則を問題にしているのであって、これは物理学が金剛界的であるのに対して、胎蔵界的世界観だと云えるだろう。

例えば物理学では、かりに光の速度を超えるものがあるとしても、それは物理学としてはまず普通には認めないし、それから長さ、時間、温度という基本的な単位についても、それぞれ実測可能の限界があって、その限度を超えるものは、もはや物理的に意味がないとする。つまり物理

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com